

宇喜多家史談会会報

第 91 号
令和 6 年 7 月 17 日

宇喜多家史談会
〒700-0826
岡山市北区磨屋町六一二八
光珍寺気付

悲運の武将・宇喜多秀家（逸聞拾遺）

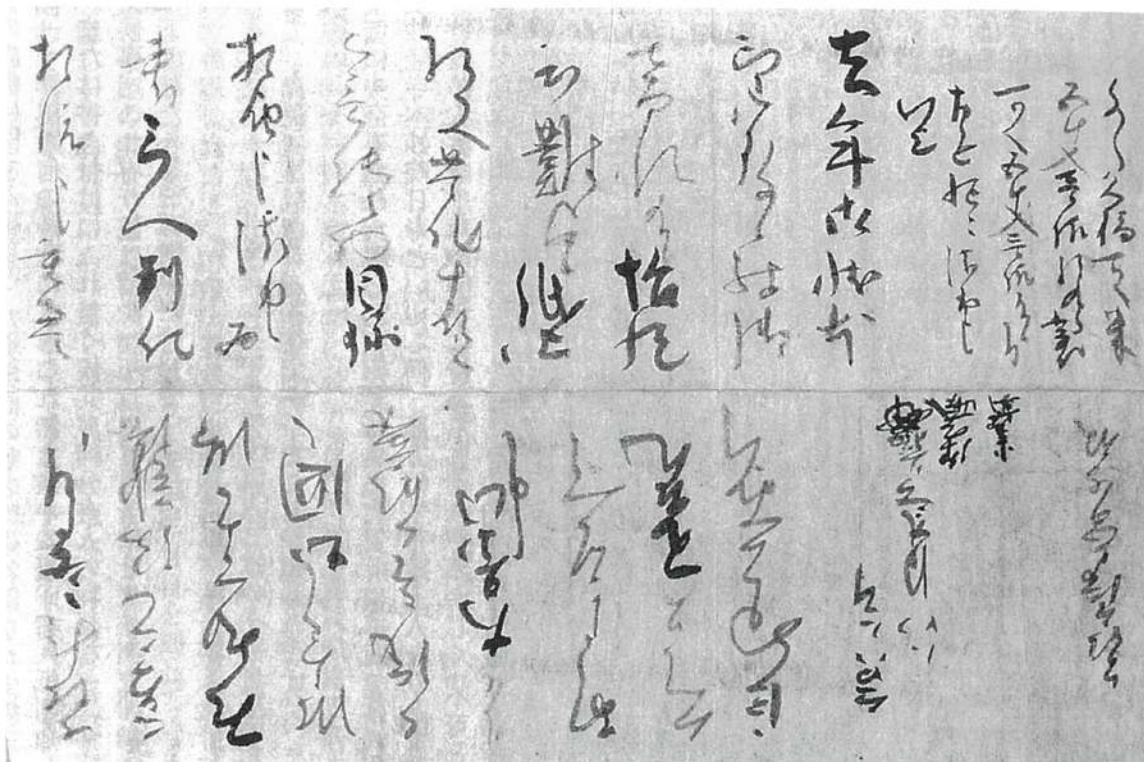
内 藤 勝 輔

表題とした「悲運の武将・宇喜多秀家」の拙稿は、前回を持って終了しましたが、取り上げていない幾つかの逸聞の中で、八丈島での秀家の生き様を物語っていると思われるものについて、補遺編にして記載します。

敗軍の将として八丈島へ遠島流配となった宇喜多秀家に、生活の窮状を慮って見継ぎの物資と音信を送るようになったのは、秀家の家老であったものの袂を分かち、関ヶ原の合戦後に江戸幕府で大身の旗本となっていた花房正成です。その経緯については、会報第一二号に花房正幸氏と出宮徳尚氏が「配所の宇喜多秀家父子への見継ぎ事始め」の記事で詳細に考証されており、拙稿の一〇回目（会報第八七号）でも詳述している通りです。

正成の見継ぎと音信への秀家の礼状には、「去年（慶長十八年＝一六一三）の御状は本望に存じ候。殊に御音信給い候は、怡悦に至り、紙上に尽くし難く候。」と記されています。隔絶の配所で侘びしく過ごす身に、旧臣からの連絡が如何に有難かったか、最大級の謝辞となっています。さらに物資の送付について、「重畳で喜悦は申し計り無く候。殊に元より堪え難く、しかしながら御推量あるべく候。」と書き足しており、逼迫した生活環境の下での感謝に堪えない心情を述べるとともに、今後の厚情への期待を文言外に滲ませています。

さらには、秀家は正成からの送付の品々を届けてくれた島役人に、「花房志摩守（正成）よりの音信の物、何れも書き付けの如く相届



●宇喜多秀家（久福）父子連署書状